# 新入生オリエンテーション成果尺度短縮版の開発


| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 大阪樟蔭女子大学<br>公開日: 2020-02-10<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 奥田, 亮, 川上, 正浩, 坂田, 浩之, 佐久田, 祐子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4418 |

# 新入生オリエンテーション成果尺度短縮版の開発

学芸学部　心理学科　奥田　　亮　　学芸学部　心理学科　川上　正浩
学芸学部　心理学科　坂田　浩之　　学芸学部　心理学科　佐久田祐子

**要旨**：本研究は、筆者らが開発した新入生オリエンテーション成果尺度の過去 6 年間のデータを分析して、実施がより簡便な項目数の少ない新入生オリエンテーション成果尺度短縮版を作成することを目的とした。新入生オリエンテーション成果尺度に含まれる 8 つの因子を用いて確証的因子分析を行ったところ、各因子 3 項目、計 24 項目によって構成されるモデルが採用され、新入生オリエンテーション成果尺度短縮版が作成された。これを実際に活用して、2014～2019 年度に実施された本学心理学部・心理学科の新入生オリエンテーションにどのような成果があったか、その特徴を検討した。今後の課題として、より妥当な汎用性の高い尺度を構成していくためには、異なる大学の新入生オリエンテーションについて調査を行うなどして、さらに検証を重ねていくことが必要であるとされた。

**キーワード**：新入生オリエンテーション、成果、尺度、短縮版

## 問題と目的

大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である。大学への入学は危機的な環境移行事態であり（古川・藤原・井上・石井・福田，1983）、このため、初年次教育（First Year Experience）とは、「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」（濱名，2007）と定義付けられている。

初年次教育において、新入生たちが、新環境に適応し、その後よりよい大学生活を送ることができるように、早い時期から大学生活に対する展望を持ち、4 年間を過ごす上で基盤となる対人関係を形成することが望ましい。こうした初年次教育の目標を達成するため、多くの大学では新入生に対して、大学・学部・学科に関する様々な情報を提供したり、学部の専門性を伝えるような初期教育を行ったり、同級・上級生や教員らと関係を結んだりするような場や機会を何らかの形で設けている。これらは新入生オリエンテーションや新入生研修会、あるいはフレッシュマン・キャンプなどと呼ばれる。本研究ではこれを総称して“新入生オリエンテーション（Fresher Orientation Program）”と呼ぶ（坂田・佐久田・奥田・川上，2006）。

各大学において実施される新入生オリエンテーションの内容は、大半において伝統や経験、大学・学生などの諸々の条件によって決定されている。たとえば、学園紛争の中で秩序回復活動の一環として、学生側から新入生オリエンテーションが提案され定着に至った事例（栗田，2001）や、新入生オリエンテーションの内容が年数を経てアカデミックな方向からレクレーション志向へと変化した事例（白石，2003）などもある。学内での対人的な出会いの充実が「大学満足度」を高める（浜島，2003）ことが新入生オリエンテーションの内容に反映された結果、そのような方向への変化につながったと推測される。

既に 2000 年頃には、人間関係の形成を苦手とする学生が増加しているといわれており（古沢，2001）、新入生オリエンテーションの持つ意義はますます大きくなってきた。このような状況において、新入生オリエンテーションをより効果的なものにするには、新入生にどのような面でのメリットが自覚されているのか、これを測定するための尺度が必要となる。

新入生オリエンテーションは、それぞれの大学において、様々な形態で運営されており、その効果に関する報告もしばしば見受けられる。たとえば古田他（2012）は、新入生オリエンテーションプログラムの良かった点と悪かった点について自由記述を求めるという方法でその効果を測定し、このデータに対してテ

キストマイニングの手法を用いた検討を行っている。

また、西村・石崎（2008）は、大学入学初期の大きな課題と考えられてきた人間関係づくりに主眼を置き、リレーションを重視した新入生オリエンテーションを試みたうえで、その効果を検証した。彼らは効果指標として、大学生活不安尺度得点の変化を検討し、人間関係に関する不安得点に有意な減少がみられたことから、新入生オリエンテーションに一応の成果、すなわち不安を減少させる効果が確認されたと考察している。

辻野他（2010）は、彼女らが所属する短期大学において新入生オリエンテーションを実施後に、「短大の先生に親しみを感じる」、「短大に対して親しみを感じる」、「短大の先生に安心して何でも相談できそうである」、「本短大に入学したことを誇りに思う」、「入学した学科（コース）で目標をもち努力したいと思う」、「オリエンテーションの期間中は有意義に過ごせたと思う」、「オリエンテーションの期間中は楽しく過ごせたと思う」、「オリエンテーションの内容を理解するのは難しかった」、といった項目からなる質問紙を実施することにより、新入生オリエンテーションの教育効果について測定を行なっている。

新入生オリエンテーションとして、キャンプを経験させる大学においては、目的とされる達成項目（「学生としての規律正しい生活を送ることができる（生活）」、「自然環境に配慮した生活を送ることができる（環境）」、「仲間のことを考えて行動することができる（仲間）」、「野外スポーツ（キャンプ）のスキルを身につけることができる（技術）」）に対して、「達成できた」か「できなかった」かを評定する方法を用いて、キャンプの効果について自己評価を求めている（黒澤，2006）。

流通経済大学社会学部では、新入生オリエンテーションの一環として、先輩が「現在何を勉強しているか」「何に熱中しているか」について新入生にプレゼンし、その後双方で話し合ったうえで、新入生達は「自分たちが何をするか」を先輩たちに問われるという、「しゃべり場」の機会を設けた（高橋，2014）。そしてこの「しゃべり場」に関して、「大学生活への不安の解消に役立ちましたか」、「大学生活への意欲が増しましたか」、「あなたのこれからの大学生活を考えるヒントになりましたか」といった問いにより効果を測定している（高橋，2014）。

佐久田・奥田・川上・坂田（2008）は、彼女らが所属する女子大学で実施される新入生オリエンテーションにおいて、どのようなことが獲得されたかを測定するため、新入生オリエンテーション実施後に、新入生オリエンテーション成果尺度を用いた質問紙形式の調査を行った。複数の学科の新入生を対象に得られたデータに対して因子分析を実施した結果、「一回生との親密化」、「上回生との親密化」、「教員との親密化」、「居心地の良さ」、「帰属感高揚」、「情報獲得」、「親友獲得」、「宿泊肯定」、「将来展望獲得」の 9 因子が抽出された。この尺度では、新入生オリエンテーションを通して、同じく入学した新入生間、新入生オリエンテーションに参加し、ファシリテーター的な役割を担った上級生との間、そして学科の教員との間、それぞれに対して関係形成がなされるかどうかが「一回生との親密化」、「上回生との親密化」、「教員との親密化」によって測定される。さらに、特に新入生の中で、これからの大学生活を送るうえでの基盤となりそうな深い人間関係の獲得ができたか否かが「親友獲得」によって測定される。また、新入生オリエンテーション内で教員あるいは在学生から提示される情報によって、大学で生活していくために必要だと思われるような情報が獲得できたか否かが「情報獲得」、これから過ごす大学生活そのもののイメージをつかむことができたか否かが「将来展望獲得」によって測定される。さらに、新入生オリエンテーションの場が、自分にとって居心地の良い場であったかどうかが「居心地の良さ」、新入生オリエンテーションを通してこれからの大学生活に対する期待や肯定感が高まったか否かが「帰属感高揚」によって測定される。

しかしこの新入生オリエンテーション成果尺度は 46 項目（当該年度の新入生オリエンテーションの内容によって、さらに 10 項目前後の temporal 項目を追加している）から構成されており、当該オリエンテーション経験に伴う変化の測定が必要となるケース等を考えると、項目数が多いため、回答する学生に負担がかかり、黙従傾向や中間選択傾向などの反応バイアスを強める可能性がある。

そこで本研究では、2014～2019 年度の過去 6 年間の新入生オリエンテーション成果尺度の測定データを分析し、佐久田他（2008）における新入生オリエンテーション成果尺度の各因子を構成する項目を絞って、より実施しやすい新入生オリエンテーション成果尺度の短縮版を作成することを目的とする。

本研究では複数年にわたるデータを総合的に分析することにより、尺度の作成を目指すが、対象となった新入生オリエンテーションは基本的には共通のフレームで実施されたものである。以下にその内容について具体的に記す。

2014 年度から実施されている新入生オリエンテーションは、入学して間もない時期（入学式後の数日間）に教務的オリエンテーションと共に実施される履修の仕組みを理解するためのゲームと、教員や上級生、同級生との交流を促進する目的で行われる半日の諸企画、さらにそれから 1〜2 週間後に学外の施設で半日程度かけて実施されるグループワークや会食等の諸企画の二部から構成されている。

本研究では、以上のような新入生オリエンテーションの実施内容で取得されたデータに基づき、新入生オリエンテーションにおいて学生がどのようなことを得たと考えているかについて、簡便な測定が可能となるような新入生オリエンテーション成果尺度の短縮版を作成する。

## 方法

**調査協力者**　2014 年度に大阪樟蔭女子大学心理学部、2015 年度から 2019 年度に同大学学芸学部心理学科に入学した 1 年生 444 名（平均年齢 18.19 歳、標準偏差 0.77）を対象とした。

**調査時期**　2014 年から 2019 年の各 4 月に調査は実施された。

**手続き**　各年度の 4 月に新入生オリエンテーションが行われた後、授業時間内に集団法で新入生オリエンテーション成果尺度（佐久田他，2008）が実施された。

**倫理的配慮**　回答に際しては、研究の目的が集団の傾向を把握するものであること、結果が研究の目的以外に使用されることはないこと、プライバシーに関しては秘密厳守することをフェイスシートに記載していた。

**分析方法**　分析には Amos23 および HAD（清水，2016）を使用した。

## 結果と考察

本研究の目的は、新入生オリエンテーションの成果を測定する簡便な尺度（短縮版）を作成することである。このため佐久田他（2008）の因子分析結果を踏まえた、新入生オリエンテーション成果尺度の構成を目指した。佐久田他（2008）の結果においては、先述の通り「一回生との親密化」、「上回生との親密化」、「教員との親密化」、「居心地の良さ」、「帰属感高揚」、「情報獲得」、「親友獲得」、「宿泊肯定」、「将来展望獲得」の 9 因子が抽出されている。しかしながら、近年の本学の新入生オリエンテーションにおいては、宿泊を伴う新入生オリエンテーションは実施されておらず、また項目がそもそも 2 項目であることも鑑みて、本研究の以下の分析においては「宿泊肯定」下位尺度を除いた、8 つの下位尺度に対して分析を行っていくことにした。

8 つの下位尺度（因子）それぞれにおいて、標準化推定値が高く、各因子の意味をより強く表現していると思われる 3 項目ずつを用いて確証的因子分析を行った。その結果、すべての項目で標準化推定値が |.51| 以上となり（Figure 1）、適合度は $\chi 2$（224）＝501.51, $p$＜.01, GFI＝.91, CFI＝.95, RMSEA＝.06 となった。そこで、新入生オリエンテーション成果尺度短縮版として、この 8 因子各 3 項目計 24 項目のモデルを採用した。各因子が高く負荷する項目で下位尺度を構成し、$\alpha$ 係数を算出した結果、各下位尺度の $\alpha$ 係数は「情報獲得」「将来展望獲得」以外のすべてにおいて .70 以上の十分な値を示した。「情報獲得」「将来展望獲得」に関しても、それぞれ .65、.68 であり、許容範囲であると判断された。そこで、各因子が高く負荷する項目の平均点により、各下位尺度得点を算出したところ、Table 1 の通りであった。

**Table 1. オリエンテーション成果尺度短縮版下位尺度の基本統計量，$\alpha$ 係数，検定値 3 に対する 1 サンプル $t$ 検定結果**

| | $M$ | $SD$ | α係数 | $t$ 値 |
|---|---|---|---|---|
| 一回生との親密化 | 3.77 | 0.77 | .79 | 5.41 *** |
| 上回生との親密化 | 3.18 | 0.91 | .86 | 4.09 *** |
| 教員との親密化 | 3.57 | 0.78 | .80 | 14.93 *** |
| 居心地の良さ | 3.49 | 0.86 | .81 | 11.65 *** |
| 帰属感高揚 | 3.67 | 0.74 | .78 | 18.43 *** |
| 情報獲得 | 2.91 | 0.80 | .65 | -2.36 * |
| 親友獲得 | 3.55 | 0.97 | .90 | 11.63 *** |
| 将来展望獲得 | 3.19 | 0.73 | .68 | 5.41 *** |

注) * $p$ < .05, *** $p$ < .001。

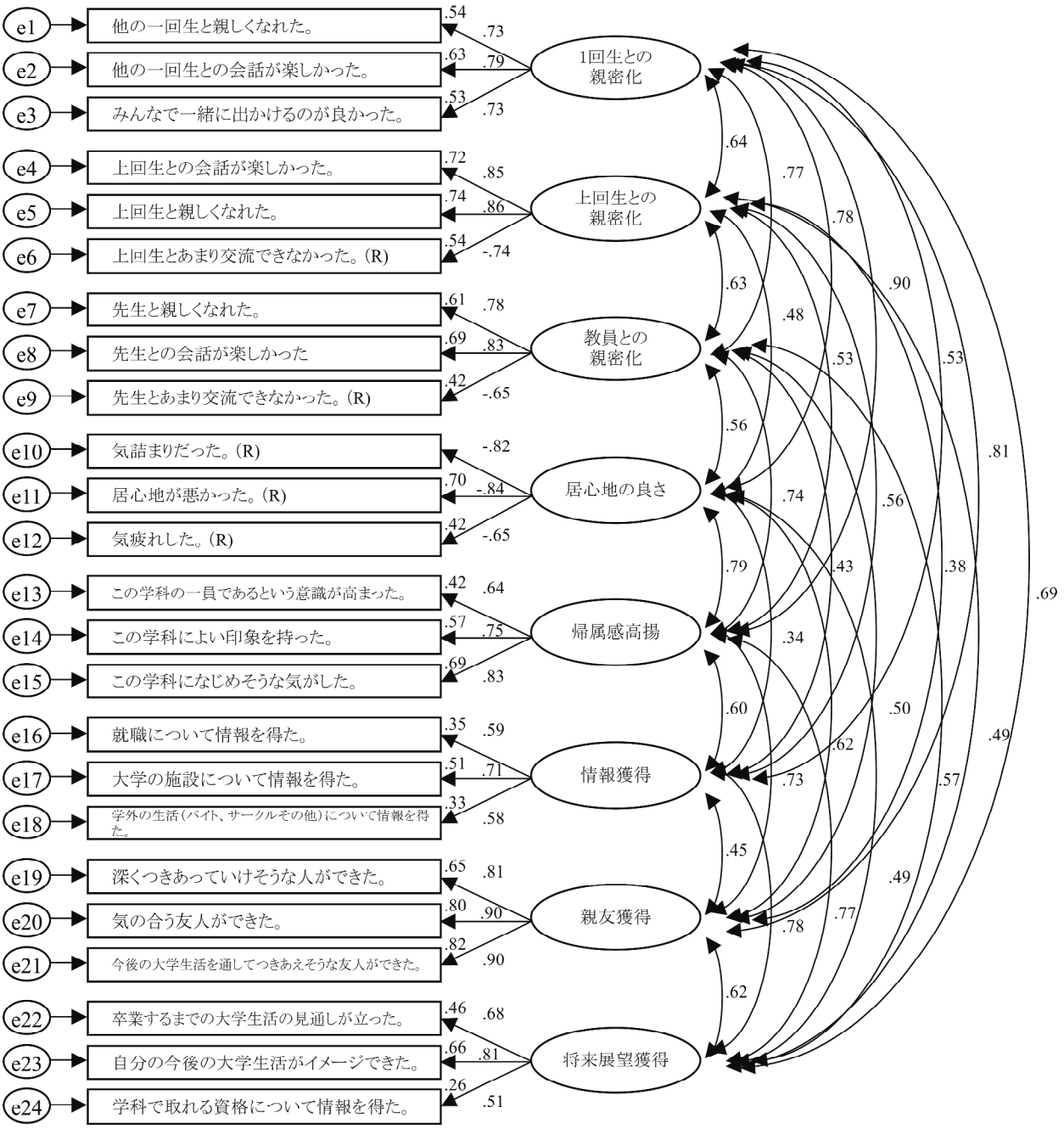


**Figure 1. 新入生オリエンテーション成果尺度の確証的因子分析。**
**注）（R）は逆転項目。**

また、オリジナルの新入生オリエンテーション成果尺度との相関係数を算出したところ、「一回生との親密化」以外は、「上回生との親密化」（$r$=.96, $p$<.001）、「教員との親密化」（$r$=.94, $p$<.001）、「居心地の良さ」（$r$=.90, $p$<.001）、「帰属感高揚」（$r$=.96, $p$<.001）といずれも.90 以上の強い（効果量の大きな）相関が認められた（「情報獲得」「親友獲得」「将来展望獲得」に関してはオリジナル版と短縮版で項目が同一であった）。「一回生との親密化」に関しても、$r$=.50（$p$<.001）と相対的に低めの値ではあるが効果量の大きな相関が認められた。

さらに、オリエンテーション成果尺度各下位尺度に関して中点（3：どちらでもない）を検定値とする 1 サンプルの $t$ 検定を行った。その結果を Table 1 に示す。「情報獲得」以外の全ての下位尺度に関して中点 3 より有意に高いことが示された。特に、「1 回生との親密化」、「帰属感高揚」、「教員との親密化」、「親友獲得」で高い値が示された。一方、「情報獲得」に関し

ては中点3より有意に低いことが示された。この結果から、下位尺度得点については、当該の過去6年間の新入生オリエンテーションが、新入生に対して新入生同士や教員との関係を親密化させ、学科への帰属感を高める上で、一定の成功を収めていることが窺える。

各下位尺度得点の2014〜2019年度の平均値の推移（差）について、一要因の分散分析を行ったところ（Figure 2−9）、「1回生との親密化」において年度間に有意な差が見られ（$F(5, 411)=2.43$, $p<.05$）、多重比較（Bonferroni法、以下すべて同じ）の結果、2014・2018・2019年度が2016年度に比べて有意に高かった（$p<.05$; $p<.05$; $p<.01$）（Figure 2）。また、「上回生との親密化」においても有意な差が見られ（$F(5, 411)=7.74$, $p<.01$）、多重比較の結果、2014・2015年度が2016・2017・2019年度に比べて有意に高く（いずれも $p<.05$; $p<.01$; $p<.01$）、2019年度は2016・2018年度と比べても低かった（$p<.05$; $p<.01$）（Figure 3）。さらに、「情報獲得」において有意な差

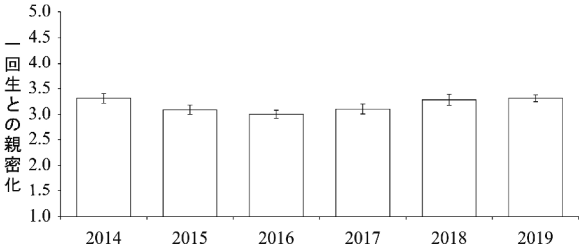


Figure 2. 各年度における「一回生との親密化」平均値（エラーバーは標準偏差）。

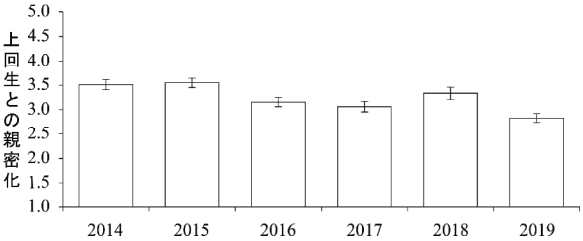


Figure 3. 各年度における「上回生との親密化」平均値（エラーバーは標準偏差）。

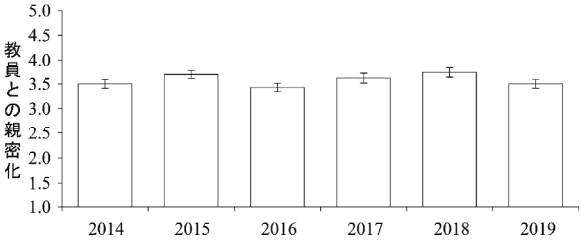


Figure 4. 各年度における「教員との親密化」平均値（エラーバーは標準偏差）。

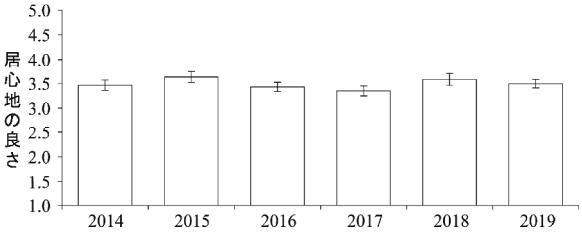


Figure 5. 各年度における「居心地の良さ」平均値（エラーバーは標準偏差）。

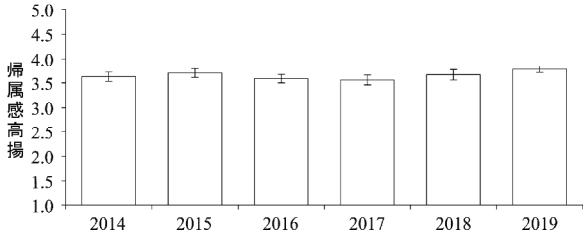


Figure 6. 各年度における「帰属感高揚」平均値（エラーバーは標準偏差）。

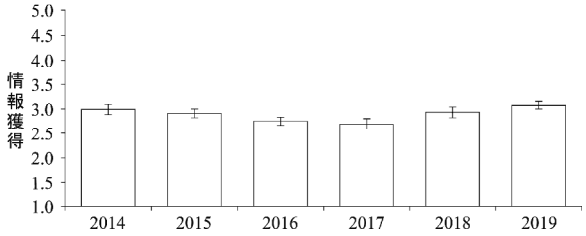


Figure 7. 各年度における「情報獲得」平均値（エラーバーは標準偏差）。

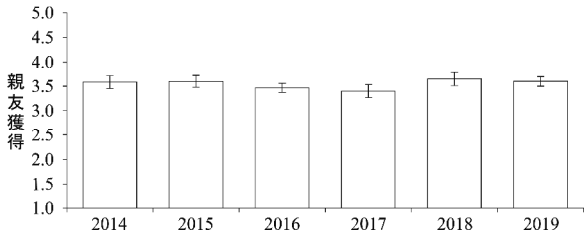


Figure 8. 各年度における「親友獲得」平均値（エラーバーは標準偏差）。

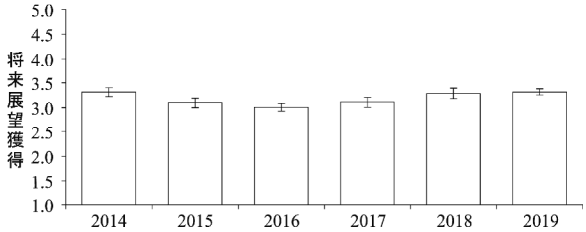


Figure 9. 各年度における「将来展望獲得」平均値（エラーバーは標準偏差）。

が見られ（$F(5, 411)=2.63$, $p<.05$）、多重比較の結果、2014 年度が 2017 年度に比べて有意に高く（$p<.05$）、2019 年度が 2016・2017 年度に比べて有意に高かった（共に $p<.01$）（Figure 7）。最後に、「将来展望獲得」においても年度間に有意差があり（$F(5, 411)=2.43$, $p<.05$）、多重比較では 2014・2018・2019 年度が 2016 年度に比べて有意に高かった（$p<.05$; $p<.05$; $p<.01$）（Figure 9）。

これらの結果から、各年度の新入生オリエンテーションの成果が比較できる。全体として 2014 年度のオリエンテーションにおいて高い成果が認められた一方、2016 年度は成果（新入生オリエンテーションを通じた学生の様々な獲得感）が相対的に低かったと言えよう。2019 年度については他年度よりもいくつかの面でより高い成果が見られる一方で、上級生との親密化がうまく図られなかったことも、下位尺度得点から理解できる。

以上、本研究において、新入生オリエンテーション成果尺度短縮版が作成された。この短縮版尺度を用いることで、回答する学生の負担を減らしつつ、実施した新入生オリエンテーションを適切に評価できると見込まれる。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。問題でも記したように、現在各大学で行われている新入生オリエンテーションは、何のためにどのようなことをするかという目的や実施形態が、大学によって様々であるため、どのような下位尺度や項目群が妥当となるかは異なるであろう。その一方で、新入生オリエンテーションに望む成果として、各大学でおおよそ普遍的に含まれる要素（因子）があるとも考えられる。本研究は単一大学単一学科のデータにもとづくものであり、より妥当な、あるいはより汎用性の高い新入生オリエンテーション尺度短縮版を作成するには、異なる専攻や異なる大学の新入生オリエンテーションについて調査を行うなどして、さらに検証を重ねていくことが必要である。

## 引用文献


古川雅文・藤原武弘・井上 弥・石井眞治・福田 廣（1983）. 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究　心理学研究, *53*, 330-336.

古沢由紀子（2001）. 大学サバイバル　集英社

古田雅明・中村紘子・香月菜々子・加藤美智子・田中優・西河正行・八城 薫（2012）. 新入生オリエンテーションに対する学生による評価の分析　人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要, *14*, 59-70.

浜島幸司（2003）. 大学生活満足度　武内清（編）キャンパスライフの今（pp. 73-90）玉川大学出版部

濱名 篤（2007）. 日本における初年次教育の位置づけと効果　カレッジマネジメント, *145*, 5-9.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮（2004）. 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響（3）―― 出身校，居住形態との関連から ――　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, *3*, 57-68.

栗田充治（2001）. 事例紹介　学生と創る新入生オリエンテーション　大学と学生, *440*, 27-32.

黒澤 毅（2006）. 新入生オリエンテーションキャンプの効果　びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, *3*, 59-68.

仲間正浩・上間陽子・片岡 淳・西岡尚也（2010）. 琉球大学教育学部新入生合宿研修の実施の準備と結果について ―― 2009 年の実施結果とアンケート集計 ――　教育実践総合センター紀要（琉球大学）, *17*, 143-154.

西村昭徳・石崎一記（2008）. リレーションを重視したオリエンテーションが新入生の大学生活適応感に及ぼす影響　東京成徳大学人文学部研究紀要, *15*, 51-60.

奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子（2003）. 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響（2）―― personality との関連から ――　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, *2*, 73-82.

奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子（2006）. 新入生オリエンテーションに関する研究（2）―― オリエンテーション成果が大学生活充実度に及ぼす影響 ――　日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 1254.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩（2005）. オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, *4*, 75-86.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩（2006）. 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, *6*, 59-71.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩（2007）.

新入生オリエンテーションに関する研究（4）オリエンテーション時の宿泊体験に関する自由記述データの分析　日本心理学会第 72 回大会発表論文集，1320.
佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之（2007）．新入生オリエンテーションに関する研究（3）―― オリエンテーション成果が大学生活充実度の変動に及ぼす影響 ――　日本心理学会第 71 回大会発表論文集，1169.
佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之（2008）．新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について（2）複数学科のデータに基づく分析　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要，*7*，47-56.
佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之（2012）．新入生オリエンテーションに関する研究（6）オリエンテーション成果が大学生活充実度の変動に及ぼす影響（2）　日本心理学会第 76 回大会発表論文集，1134.
清水裕士（2016）．フリーの統計分析ソフト HAD ―― 機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案 ――　メディア・情報・コミュニケーション研究，*1*，59-73.
白石義郎（2003）．新入生の大学への適応　武内清（編）キャンパスライフの今（pp. 73-90）玉川大学出版部
高橋伸子（2014）．大学生のピア・サポートプログラムに関する一考察 ―― 流通経済大学社会学部初年次教育における新入生支援の事例から ――　流通経済大学社会学部論叢，*25*，57-75.
辻野順子・森川英子・西 美江・津田尚子・高井聰美・中楠登志子・岡本 恵（2010）．学外宿泊オリエンテーションの教育効果の検証 関西女子短期大学紀要，*19*，27-38.

## Development of a Short Form of the Fresher Orientation Program Outcome Scale

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Akira OKUDA
Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Masahiro KAWAKAMI
Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Hiroyuki SAKATA
Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Yuko SAKUTA

ABSTRACT

This study analyzed data for the past 6 years using the Fresher Orientation Program Outcome Scale, and aimed to create a shortened version of the New Fresher Orientation Program Outcome Scale with fewer items which is easier to measure. A confirmatory factor analysis was performed using the eight factors included in the Fresher Orientation Program Outcome Scale. As a result, a model consisting of three items in each factor, 24 items in total, was adopted, and a new version of the Fresher Orientation Program Outcome Scale was constructed. Utilizing this scale, we examined the characteristics of students' achievements during the Fresher Orientation Program of the Department of Psychology from FY2014 to FY2019. As a future prospect, in order to construct a more appropriate and versatile scale, it is necessary to conduct further verifications, such as investigating the Fresher Orientation Program of new students at various universities.

Keywords: fresher orientation program, outcome, scale, short form